

電子化・国際化・資源共有

土屋俊
(千葉大学)

まとめ

- 大学図書館は、「大学改革」と「社会の情報化」という二つの歴史的な潮流を迎えている
 - このなかで大学図書館が取り組むべき課題は、
 - 電子化
 - 国際化
 - 資源共有
- である
- しかし、実はこれこそ日本の大学が今取り組むべき課題である
 - 大学図書館の取り組みが日本の大学の将来をきめるのかもしれない

電子化

国際化

キャンパスの電子化
への対応

SPARC
ICOLC
など

図書館からの発信

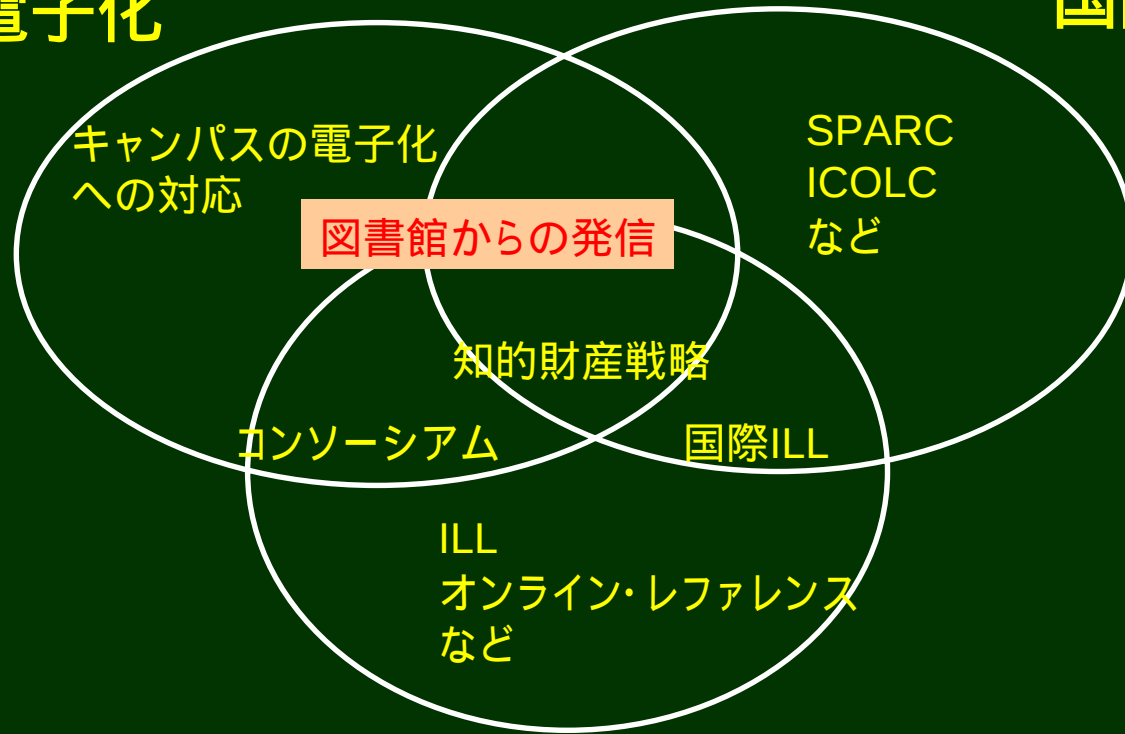
知的財産戦略

コンソーシアム

国際ILL

ILL
オンライン・レファレンス
など

資源共有



大学と大学図書館

- 大学改革と社会情報化の同時進行
 - 日本の大学の何が問題とされているのか
 - 「IT革命」はブームではない
- 変化する大学の社会的役割(近代を超えて)
 - (指導的)人材養成からの脱皮
 - 国策直結からの脱皮
 - 翻訳学問からの脱皮
- 変化する大学図書館の役割
 - 教育における支援機能
 - 学術コミュニケーションの仲介者としての機能
 - (学界を含む)社会との直接連携の要請
- 大学図書館こそが大学改革を支える

昨今のいわゆる「大学改革」

1990年代の政策

- 設置基準大綱化(教養教育の改革)
- 大学院重点化(大学院教育の改革)
- 科学技術基本計画と基礎研究振興
- 研究成果の直接還元(TLOなど)
- とくに90年代後半の展開
 - 競争的環境、競争的資金と点検・評価
 - 産学連携・「知的財産戦略大綱」(2002)
 - 教育の重視(掛け声だけ?)
 - 「世界レベルの研究」
 - いわゆる「統廃合」

大学改革の方向性

- 高等教育の状況

- アメリカ・(日本)型(50%)

- 12年度日本では大学40%、短大9%、専門学校20%

- イギリス・ドイツ型(30%)

- フランス・ヨーロッパ型(10%)

- 発展途上国型

- 日本の大学改革

- ドイツ型帝国大学方式からの脱出

- 戦後の大学大衆化(私学の問題)

- アメリカ型二重構造体制(研究大学 + 4年制学部大学)への移行?

要するに、

1. 世界水準の研究をする大学

- 受賞件数等の水準の向上
- 学位授与の正常化(スタート資格としての学位)
- 影響力のある(被引用件数の多い)論文を産出
- でも、人文社会系では？

2. ちゃんとした教育をする大学

- 卒業生の品質保証をする学部教育(国立の役割)
- その前提としての教養教育(「設置基準大綱化」)

3. 教育・研究を社会に直接還元する大学

- 産官学連携(TLOなど)
- 教育サービス(これが案外難しい)

一方で、先進国社会の不可避の情報化

- 「電子図書館」と「インターネット」のアナクロニズム

1993年 NII(通信と放送の融合)

1995年 GII

(日本で国会関西館構想、電子図書館建議)

1996年 日本でのインターネット爆発

1997年 インターネット社会へ(図書館はまだCDROM)

1999年 電子ジャーナル普及へ

- オープンなインターネットを社会情報基盤とする

- 社会の「神経」としての情報通信システム(電話、POSなど)

- モバイル化(PDA、Iモードの展開、WAP規格など)

- 電子図書館としてのWWW

- そのなかでの大学図書館の位置づけ(あるいは、失われる位置)

大学改革・情報化からの図書館へのデマンド

- 教育機関としての社会的役割
 - 学部レベル教育の教養化
 - 修士レベル教育の非学問化
 - 学生(正規・非正規)から見て使える学習図書館
- 研究機関としての社会的役割
 - 先端研究の推進(学術情報の円滑な流通)
 - そもそも「研究」概念の変質が予想される(資源制約、重点投資等々)
 - 研究成果の移転の推進(情報発信)
研究者と社会から見て使える研究支援機能

しかし、話は簡単ではないが、、、

- 大学が変わらなければ図書館が変わりようがない
 - 大学側における目的意識の改革はあるか
 - 「いまなんとか動いているのになぜ変えるのか？」
 - 研究成果は比較的に見えやすいが、教育の品質検査は？近年注目の社会貢献は？
- 図書館が大学を変えることができるのか
 - YES! (大学も図書館のサービス業)
 - 教育と研究において、学生と教員が共有する場としての図書館
 - 情報化の拠点としての大学図書館
 - 市民との接点をもつものとしての大学図書館

とはいえ、学習図書館構築不可能論も、、、

- 勉強の場なくして勉強なし
 - 「受験勉強が忙しくて、本を読む暇がない」学生
- 学生用図書の圧倒的不足
 - 国大図協の調査(1998年) 1人新刊書0.6冊
 - もう遅い、誰の責任か(図書館の責任ではない)、国民的不見識
- そもそも学生は本を読むのか、読ませることに意味があるのか
- 教員は本を読んでいるのか？
 - 何のための教育？研究よりも読書
 - 情報リテラシー教育の真の課題

生涯学習と大学図書館

- 地域の情報(学術的)
- 図書館の開放、地域の異館種との分業
- 生涯学習こそが大学が生きる道
 - 半分以上が24歳以上になる日は近い(アメリカなみ)
 - イギリスにおけるHEとFEの基盤統合
- この目的から演繹される図書館の役割
 - 場所(物理的図書館とネット上の図書館)
 - 中身(電子資料の機関責任による恒久保存)
 - Institutional repository (MITのDspaceなど)
 - Open Archive Initiativeのmetadata harvesting protocol
 - Walk-in Useと電子資料(著作権、知財管理)

教員の役割

- 図書館資料への責任

- 教員として: 資料を使う授業 → 「問題提起・解決できる学生」
- 研究者として: 大学としての研究活動のための資料
 - 予算執行の計画性、体系的収集

- しかし、自覚は欠如している

- 学生は図書館を授業のために利用しない(教科書中心主義?)
- 技術の進歩についていっているか(自分の研究方法を盲信、「電子ジャーナル問題」で顕著)
- 学生のために本を買うという自覚はあるか(研究室に本を置く意味は?)
- 大学としての戦略の要求(個人の知的欲求に基づく研究から社会の要請にこたえる研究へ(善し悪しは別として))

電子図書館と図書館自動化

(建議(平成8年)という間違いは別にして)

- 「電子図書館とは何か」がわからなかった
奈良先端の不見識
目玉電子化方式
二流論文収集方式
標準化努力欠如
需要研究の欠如(誰のため、何のため)
- やっと電子図書館の姿が見えてきた
 - アクセス(利用): 学生向けと研究者向け
 - パブリッシング(発信): 社会・学会向け
- 図書館員のスキルの問題はもうないはず

情報化による

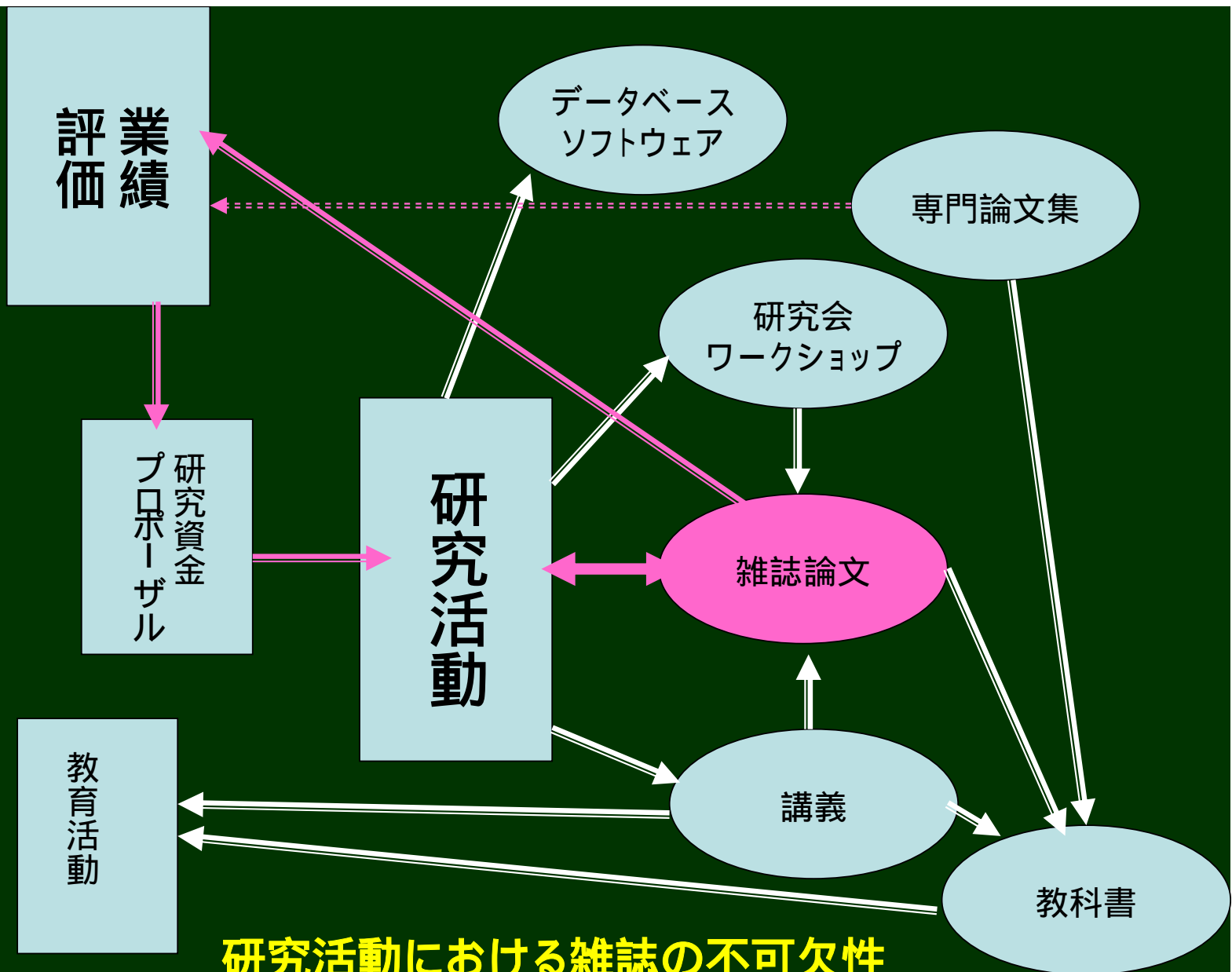
学術的コミュニケーションの変容？

基本的には1980年代インターネットによって研究者が自分でコミュニケーションを制御できるようになったはずだが、

現実にはそうは展開していない

- 学術雑誌はどうか？ 電子ジャーナル化だが
- 学会はどうか？ 組織率の低下(機関購読の増加)
- 授業で使う教科書はどうか？ 紙の教科書はいつまで？
- Serials Crisis → 自立的出版か商業出版か

これらすべてに教員はまったく無自覚

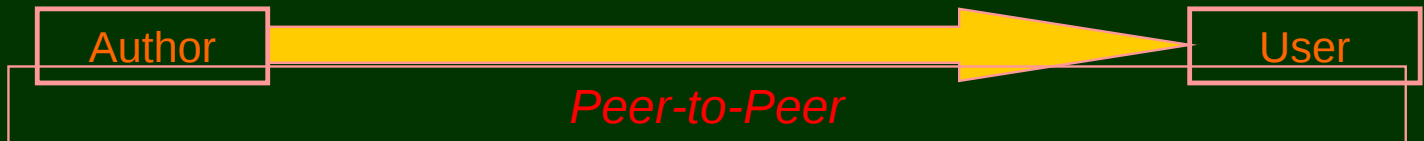


大学図書館の役割 (SPARCより)

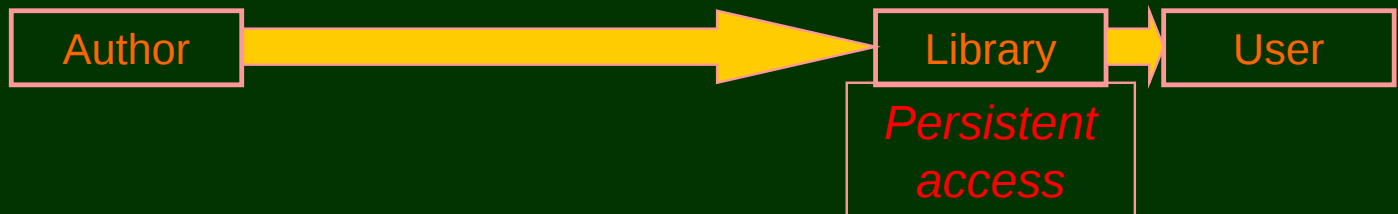
TRADITIONAL VALUE CHAIN



DISINTERMEDIATION?



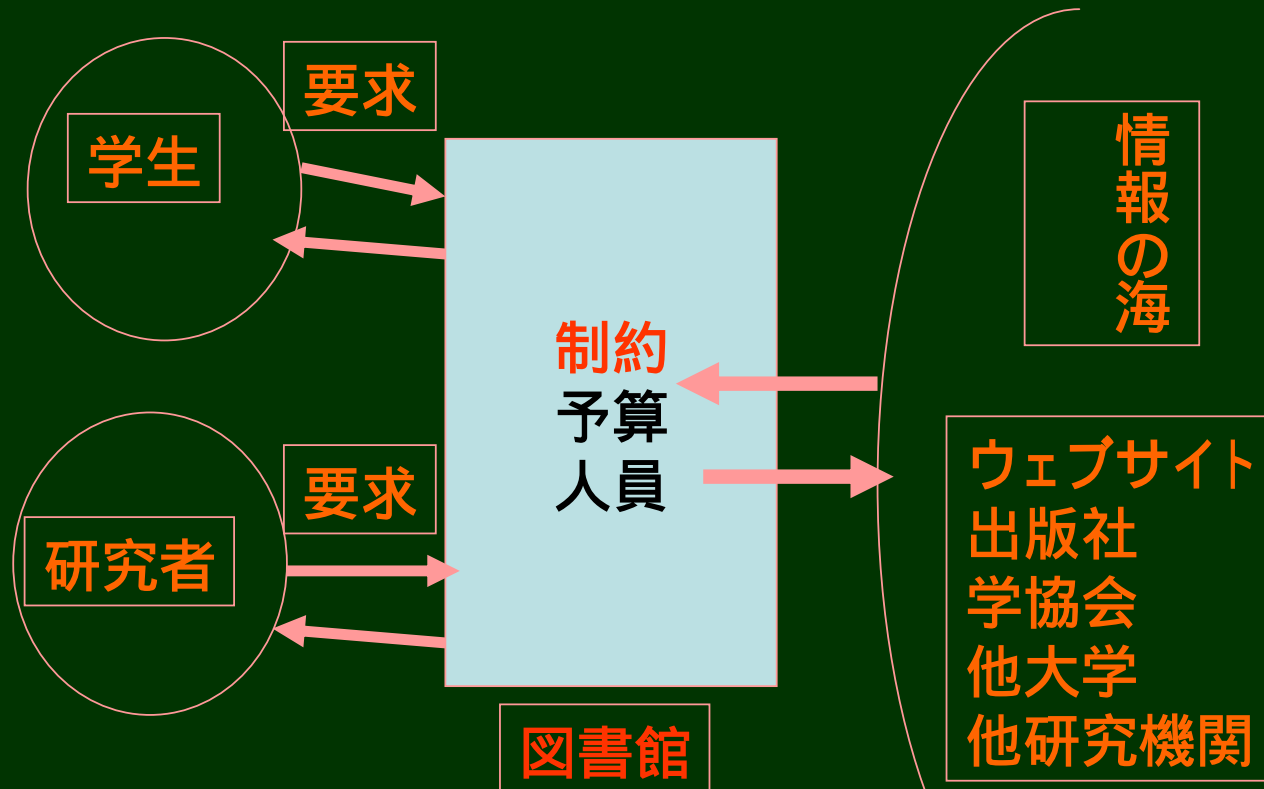
OR RE-INTERMEDIATION?



当面の対応と将来的対応

- コンソーシアムの交渉
 - 国立大学図書館協議会タスクフォース
 - いくつかのコンソーシアム形成
 - 国立、公立、私立の連携
- 学内における予算の中央化
 - 研究者が個別に決定するメカニズムを改革
 - しばらくは、Big Dealへ加担か？
- 価格下降圧力創出戦略の必要性
 - 国際協力 (ICOLC、ISCA)
 - 出版事業と情報教宣 (SPARC的事業、学内PR)

ゲートウェイ・インターフェイス・アクセス支援 (ただし、情報の流れは「中抜け」になる)



インターフェイスからアクセス・ファシリテータへ
契約(導入、著作権管理、メタデータ管理など)

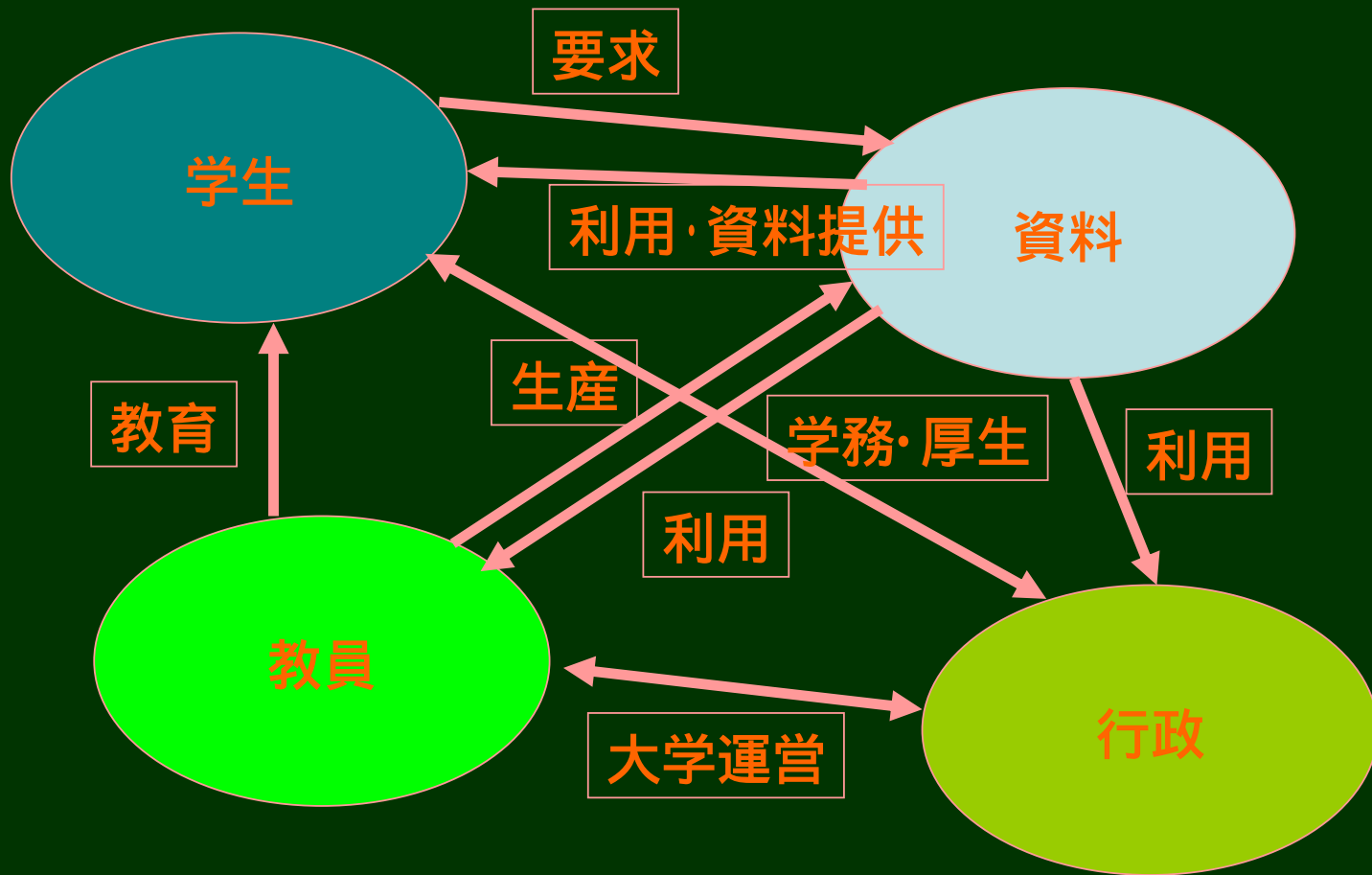
大学における大学図書館の役割の将来

- 学生に自分で勉強するように仕向ける(つまり、本を読ませる)のは図書館
- 教員に世の中の情報化を思い知らせるのは図書館
- 大学運営における情報基盤の重要性を自覚して、実際に構築するのは図書館(ちなみに情報屋さんの出番はもう終わったかもしれない)
- キャンパスの中と外とを(発信も含めて)「契約」と「管理」によって仲介するのが図書館
- 基盤の一元的管理
 - ネットワークとコンテンツ
 - 予算と人員

21世紀のキャンパスでは情報基盤が本質的

- 多様な背景の学生が自分の条件に応じて、自分で学ぶ(パートタイム学生・進路変更学生の増加、いわゆる「学力低下」の本質化:準備なき学生への教育の一般化)
- 対面教育と遠隔・時差教育の使い分け(教室の意味の再定義)
- 運営手法の効率化(統一IDと共通データベースに基づく学生・教員管理、電子的コミュニケーションによる会議の削減、権限の分散化による即時対応、対外・学内文書交換の電子化など)

大学の情報基盤とは？



図書館員のイニシャティブを求めて

- サブジェクト・ライブラリアンは教員で代用(ただし当面)。研究の直接支援はこれで十分
- 学生相手のリテラシー教育は積極担当
- 大学の知財管理の企画運営(機関レポジトリ)
- 契約・業務管理(外注)・学内連携が主要任務
- 図書館は、情報基盤のすべてにかかわり、図書館が大学の情報基盤を作るしかない
- それが、次世代の図書館像を規定する
- 図書館は、大学の目的と現状を理解して、大学の目的の実現する役割を持つ

図書館の役割の実現が大学改革を実現

- 学習支援機能の実現
 - 自分で考えることができる学生を育てる
 - 図書館資料とウェブリソースの継ぎ目なし検索
 - コア科目と支援図書予算
- 研究支援機能の実現
 - 電子ジャーナルの導入
 - 研究資料購入の中央経費化
- 大学知財管理(発信機能:生涯学習・産学連携支援)
 - 学内の分担(図書館:メタデータ管理と永久アクセス保障 (institutional repository))
- 情報基盤の一元管理へ
 - 図書館とセンターの統合(的連携)